

主な登場人物

○アドルフ

二十八歳 古代遺物の王宮研究員

銀髪紫目。エイダとは寄宿学校からの付き合いで腐れ縁。

エイダに会う度に嫌味を言って突っかかってくる。

○エイダ

二十八歳 軍で昇進しまくったので結構偉い軍人さん。

鍛錬・肉・酒が好きな腹筋バキバキ系女子。

男性経験無し。

次の頁からいきなり本編がはじまります←

0. 馬鹿げているけど、危険な呪い

なんて事はない。よくある話だ。

旧文明が残した遺跡から研究し甲斐のある遺物が発掘されて城まで持ち帰られ、それを研究員が解析しようとしたところ、遺物に込められていた呪術が暴発して、研究員が呪われてしまった。

そしてそれが、これまで一度も見た事のない類いのものだった。今回の件がそんなよくある例と少し違ったのは、その呪術がどうしようもない馬鹿げた内容でありつつ、とても危険なものだったということ。

言わばアホの呪い。そしてエロの呪い。

制作者としては、エロの祝福だったのだろうが。

でもやっぱり、アホだ。だって、どんなに早漏野郎で抜かずのほ

にやららに憧れていたとしても。二十四時間ずっと発情、ずっと射精可能——っていうのは、流石にやりすぎだ。二重の意味で。

しかも射精せずにいたら精液の作られすぎで睾丸が破裂するとかいう、大きすぎるデメリットもある。

リスクがでかすぎるんだよ。やっぱり馬鹿なのか。

それでいて性交する相手を見繕うために、呪いが発動するまでに一時間の猶予があるというのだから、本当に呆れる。

しかもその猶予時間を使って被害者の検査をしたところ、解呪は無理との判断になったそうだ。やたらと強固な術なのだろう。

やはり、この呪術を作った人間はどうしようもない馬鹿だったのだ。こんな術の開発に全力を注いでどうする。

馬鹿は死んでも治らないというが——死んでもこんなものを後世に遺さないでほしい。

1. 零時 延命作業開始

時刻は午前零時。場所は浴室や手洗いが併設されている王宮の客間の寝室。

夜の帳が下りた薄暗い部屋の中で、大きな寝台の上には二つの影がある。

一人は女。一人は男。どちらも裸になって、相手を見ていた。

寝台から離れた場所にあるソファーには、ジャラジャラと大量の勲章がついた軍服がかかっている。そしてその座面には、色気の無い地味な胸当てと下着がおざなりに畳んであった。

床の上には所々が汚れた白衣と、黒いズボン。

ゆとりがあるタイプの男性用下着も、白衣と同じように床へ転がっていた。

軍服の持ち主の女は、枕とクッションを寄せ集めたところに凭れ、開脚している。

白衣の持ち主の男は正座をしており、血走ったアメシストの目で女の股を凝視していた。

女の名前はエイダ。つまるところは私だ。

男の名前はアドルフ。私の、学生時代からの腐れ縁の男だ。

私は視線を上げて、チラリとアドルフの顔を見上げた。

癖の無い煌めく銀髪は耳にかからない程度の長さで、前髪は中央で割れている。

吊り上がり気味な瞼を縁取るのは、ふさふさとした長い睫毛。瞳は透き通るような紫色で、今は熱に浮かされたように潤んでいた。

鼻梁は高く、すっきりとされていて。小鼻まで形が良く、その下の唇は薄めではあるがこれまた形が整っている。

私はこれ程までに容姿が整っている男を、他で見たことがない。

「っ、うう……っ、はあっ、はあっ」

アドルフの形の良い唇から洩れる呼気は荒く、熱っぽい。

色白の肌はほんのりと赤く色付き、放たれる色気が凄まじいことになっていた。

とても辛い状況だろうにきちんと待てが出来ているのは流石だと思う。だが、折り畳んだ膝の上に置かれた手が何度もこちらに伸びようとしていることから、限界は近いのだろうと察した。

「っ、ふ……っ」

己の秘所を探っている私の口から洩れる息も荒い。

そろそろ、服用した媚薬の効果がキツくなってきた。

自分の指で掻き混ぜているそこは、処女地でありながら既に充分
広がっている。

待てを解いてしまおうべきだろうか。

（でも、なあ……）

ぬちぬちと内壁を押し広げながら、チラリと目の前の男の股間を見やる。

体の色より、ほんのりと赤い肉の杭。使い込まれていると赤黒くなるというが、綺麗なものだ。

チラリと見えた同僚のモノなどグロテスクで不快感が芽生えたが、これなら見ても苦痛はない。

銀色の茂みが透明な体液で濡れているのを目にしても、不思議と汚いとは思わなかった。

——だが、問題はそのサイズ感だ。

幹は太く、血管でボコボコとしていて、とても長い。

元気にビコンビコンと跳ねている様は奇っ怪な生き物じみている

が——とにかく、凶悪な大きさだった。

「うっ、く……っ」

悩んでいると、ずっとハアハア言っているアドルフが、苦しそうに呻いた。

そして元気に跳ねているソレの先端から、じわりと白濁が滲んだ。

——仕方ない。情けないことに少し、怯んでしまったが——早くしないと、この男の命が危ない。たま

私は腹を括って、寝台の上へ仰向けに寝転がった。

膝を立てて開脚し、さあ来いと視線で促す。

「はあっ、はあっ、はあ……っ！」

より呼吸が荒くなった男が、膝をついてのろのろとこちらに移動して来る。

（まったく、この男も運がない）

呪われた挙げ句、こんな色気の無い女を抱かなきゃいけないなんて。まだ胸に肉があるだけマシだが、腹なんか六つに割れているんだぞ。

新人兵士の若い男の方が、まだイケると言うヤツの方が多そうだ。こちとら趣味が鍛練と手合わせと酒だぞ。

甘いものの好きの男の方がまだ可愛げがあるわ。

(……………ん?)

やれやれ、なんて思っていたが――

私の股の間を陣取った男が、いつまでも挿入しないと気づく。

そうして「なんだ？」と不思議に思い、チラリと整った顔を伺い見れば。

アドルフは何故か、耳まで真っ赤に染め上げてじっと私の股座を見つめていた。

「い、いいい、いれる、よ」

「……あ、ああ。ゆっくりな」

凶器の根本を握ったアドルフが、秘裂に先端を擦りつけてくる。酷く緊張している様子に、意外だなと思った。

「ンッ、っ……！」

ずずっ、ぐちゅっ♡ずりゅ……っ♡入り口を押し広げて、大きな塊が入ってくる。

灼熱の杭はずっしりと重くて、硬い。

ピクピクと細かく痙攣する内壁が反射的に収縮しようとしては、密度の高い肉に押し負けていた。

「ふあ、ふああっ！しゅご、おおっ♡♡」

アドルフは高い声を上げ、ビクビクと腰を震わせていた。

反応が逆じゃないか、なんて思いながら。私は口から細く長く、

息を吐き出す。

強力な媚薬を服用していることもあって、まるで痛みがない。軽くとは言え指で慣らしたこともあって、きつと傷もないはずだ。とにかく、凶悪なものを受け入れて中が割けるようなことにならなくてよかった、と私は胸を撫で下ろした。

「んっく……っ♡んんっ、ふあ、あ……♡」

アドルフの方は、大変そうだ。

とぷっ♡と中で温かなものが広がる。私はそっと、彼から視線を外した。まあ、仕方ない。そういう呪いなのだ。

「熱い……っ、気持ちいい……！」

「っ！バカッ、一応、最初はゆっくり……！」

ズンッ♡と力強く怒張を押し込まれて、私は走った快楽に慌てて制止の声を上げた。

私が飲んだ媚薬より、圧倒的に強い催淫効果に襲われているアドルフ。今コイツは完全に理性が飛んでいる。

そのせいで普段は嫌味な表情ばかり浮かべる顔が、直視し難いほどに蕩けきっていた。

「ああっ、入ってる！好きな子のおまんこに、俺のが……！」

「……はえ？」

聞こえてきた言葉に、私の思考は止まった。

——待ってくれ。私は王から、彼と顔見知りで、寄宿学校時代の同級生で、お前は軍人で体力があるからと言われて、この延命作業に駆り出されたのだが。

喧嘩ばかりする仲ではあるが、憎からず想っているから処女を捧げてもいいかと思って、頷いたのだが。

——お前、私のことが好きだったのか……。

「あっ、あっ、すごいっ♡中、ぬるぬるしてて……っ♡」

「んっ♡っ♡ふっ、く……っ」

ゆっくりと腰を引かれて、それから押し付けられる。

その長さをふんだんに活用して中を擦られるせいで、隘路が隅々まで丁寧に、刺激されていた。

「キュン、キュンッ♡って、してるっ♡ちんぽが溶けそうだ……!」

「はっ、お、おう……そうか」

もしかしてコイツは、好きな子をいじめるタイプだったのだろうか……なんて考えながら、私は鈍い動作で頷く。緩やかな律動は、媚薬で蕩けた中に優しい刺激を与えてくれていた。

「かつ、かわいい……!すごい、かわいい!大好きだっ♡処女、貰えて嬉しいっ♡♡」

ずっ、ぐちゅっ♡たんっ♡たんっ♡

「う、く……っ♡ん、あ……っ！」

段々と速くなつていく律動を受け止めながら、私は思考を放棄して瞑目した。

いつも私に『男女』おとこおんなとか言ってくるヤツが何か言っているが、

聞こえない。

「童貞、捧げられて嬉しい……！」

その言葉で、私の聞こえないフリはすぐに終わりを告げた。

パチリと目を開けて。こちらを凝視している男の、やたらと整っている顔を見上げる。

うそだろ。お前学生時代からめちゃくちやモテたのに、童貞だったのか。そう言えば、彼女いるの見たことないな。

二十八で童貞か——と、同じく二十八で処女だった自分のことを棚上げして、哀れむ。

「ねえ、俺と結婚、して……!!」

「は……っ!？」

またもや爆弾が投下され、一瞬思考が止まる。

今、何を言われた……? と思い返して。すぐに求婚されたのだと気付いた。かあっと体温が上がる。

「結婚! ね、結婚しよっ! いいでしょ!?! ねえ、けっこんん!」

「う、うるさい! セックスに集中しろ……! 死にたいのか!？」

部下を叱る時のように無駄にありすぎる気迫で叱りつけられ――
中にある杭が、更にギンツ! と滾った。なんでだ?

「ああ、わかった! 全力で犯す! そして、種付けする……! 孕ませる!」

「うあ……!？」

ガシリと膝裏を掴まれて、体を折り畳まれる。

そうしてお尻を高く上げることになった私は——ヤツの腰を、上から叩きつけられることとなった。

「まんこっ♡まんこっ♡やわらかいっ♡温かいっ♡ここに空になるまで、吐き出していいんだ……！」

「うっ、んっ♡あっ、ああっ！」

太く、とても長いものが膣壁をズリズリと擦り、奥へと向かっていく。

媚薬に侵された処女地は既に奥の奥まで蕩けており、悦んで雄を食んだ。

呪いによってあり得ない速度で精液を作っている睾丸が、肌を叩く。

「あああっ、血が……！破瓜だ……！」

「ふ、あ、んん……っ！」

破れる感覚も無いままに破瓜を済ませたようで、感極まった様子のアドルフが目には涙を浮かべていた。

「うれしい……！うれしいよおっ！エイダ、エイダ、大好き……！！」
「……あっ!?」

そして感情のままに、アドルフはずぐんっ、と怒張を奥まで振込んだ。

「きゃ、ああっ！」

「……!!」

どちゅんっ♡とお腹の奥に衝撃が走って、甘く鋭い快感が脳天に突き抜けた。

悲鳴を上げてぎゅっと目を閉じれば、触れ合ってる体がびくんと跳ねる。

嫌な予感にそろりと目蓋を押し上げれば――

「……!!……!!!!」

瞳孔の開いたアメシストが、私の顔を穴が空く程見つめていた。そして研究員にしてはやたらと鍛えられている体が、ブルブルと震え出す。

本能が危険を感知する。ここから逃げろと、頭の中で警鐘が鳴っていた。

ここが戦場なら、振り返って部下に「撤退！ てったーい！」と叫んでいたことだろう。

「か、か、可愛い……！ 可愛い!!」

「あっ！ まっ、あああっ！ ひゃあ、んっ！」

ばちゅっ♡ぐちゅっ♡ずちゅっ！

興奮しきった様子で激しい律動を繰り返され、制止するどころではなくなってしまった。

次から次へと襲いかかる快感に、私はシーツを握り締めて耐えることしかできない。

「おまんこ、すご、締まってる……！ぐちゅっ、ぐちゅっ、ってちんぽを押し込む度に奥からどろおっ♡って愛液が垂れてきて、もつと、もつと、滑りが良くなる……！」

「いやっ、解説、しないで……！」

思わずやめたと声を上げれば、血走ったアメシストの瞳がカツ！と見開かれる。

「しないで……!?かわ、かわいい……！」

「ンンンッ！あぁッ！あ、ンっ♡♡」

腰を押し付けたままグリグリと揺すられて、普段は出さないような高い声が口から溢れる。

「そんな……っ！頭を振って、イヤイヤしてるの!?かわっ、かわあ

っ、可愛いよお!!」

「やあッ! や……っ! あっ、ああ……っ!」

フルフルとかぶりを振っただけで大喜びされ、ずちゅずちゅと奥を突かれてうまく思考が働かなくなった。

ふうふうと息を吐き出す口を、ジッ! と凝視されている。

「キスしたい! キスしたいキスしたいキスしたい!! キス! キスう!!」

「ああああっ!!♡だめっ、はげし……!」

衝動に身を任せるように激しく腰を振りたくられて、泥濘がグチヤグチヤに掻き混ぜられていく。

キュンキュンするところをしつこくノックされて、腰が痺れた。

「おまんこぐちゅぐちゅ……! ちんぽ、にゆるにゆるきゅうきゅう気持ちいい……! ああ、ねえ、エイダ、きす!!」

「わかつ、た、わかつた、からあ！きす、してい……んむう！」
許可を出した瞬間に食らい付かれ、じゅるじゅるぐちゅぐちゅと
音を立てながら口内を舐め回される。

更には口の周りをもベロベロとしつくく舐められて、口の周りが
唾液でベトベトになっていった。

「んーっ！んんっ♡♡きすっ、あまい……！くち、あまい！！エイ
ダ、エイダ、エイダ!!」

「うるっ、……!?ひゃあ、あっ！出て……！」
不意にお腹の奥でぶわりと熱が広がって。その衝撃にぎゅうう、
と中が収縮する。

ヒクヒクしている胎内が白濁を受けて痙攣し、私はあまりの気持
ちよさに一瞬、思考が蕩けた。

「なか、だし……♡すきなここに、たっぷり中出ししちゃった♡♡あ

かちゃん、産んでね……？せきにん、とるからあ♡♡♡」

「ううつ、ん！あ、あついい……♡♡」

実際は、しっかり避妊薬を飲んでいるから万が一にも妊娠はしないと思うのだけれど。

そんなことは知ったこっちゃないと、アドルフは精液を子宮口に塗り付けてくる。

「いっぱい、ちよきん、してるから……♡大きいおうち、たてるよ……♡エイダと、一緒に暮らすう……♡♡」

「ああ……！また、出て……！」

中できゅんきゅんと怒張を締め付けている内に、ゆるゆると中を擦る剛直から、またビューツ♡ビューツ♡と精液が吐き出される。

トプツ♡トプツ♡と小部屋を満たしていく白濁の量は凄まじく、繰り返される吐精で子宮はほぼ満タンになっていた。

「エイダ、手、ちようだい……♡手、繋ごう……？ラブラブセックス、したいよお♡♡」

「——あううっ！」

中に出される刺激で呆然としていれば、早くと急かすようにどっちゅん♡と奥をノックされる。

「ねえ、おててちようだい？ね、ね？エイダあ♡」

「わかつ、わかつた、ほらっ！——ひっ、ううっ！」

スツと右手を出したのに、またもやバチュンツ！と強かに腰を叩きつけられる。

「片手じゃだめっ！それじゃあラブラブセックスにならないよ！」

「わかつ、わかつ、んんっ！あ、あう、ほら……っ！」

ずっちゅずっちゅと中を擦られながら、私はどうにか反対の手も差し出した。

「はう……♡♡ありがとう♡♡じゃあ、こうして……恋人繋ぎ、しようね♡♡」

左右の指の間に、骨張った長い指が絡み付く。

それから確かめるようにギュツと、握られて。そのままにぎにぎとされながら、私はアドルフにつこりと笑いかけられた。

「剣だこで皮膚は硬いけど……すごく、小さい。女の子の手だね？」

「……っ」

——まさか、そんなことを言われるだなんて。

確かに、女にしては硬い手だ。

けれどこうして手を繋いでいたら分かる。

私の手は、男性の手より圧倒的に小さい。

「こんなに小さい手で剣を握って……すごいよ。エイダは本当にかっこいい」

「……っ、う、……っ♡」

「ん……♡」

中が、すごく蠢いているのが分かる。

心臓が、五月蠅いほどに暴れ回っていた。

可愛いと言われるより、格好いいと言われるときめくなんて。

我ながら、どうかしていると思う。

「あっ、ごめっ、出る……っ♡♡」

「ああ……っ!？」

どぷりっ♡とまた奥で熱がほとばしって。性感の上がったところにやってきた刺激に、私は背を反らした。

「ねえ、エイダ。結婚、しよ?♡俺に、責任取らせて?」

「あ……っ、あっ、んっ♡ふぁ、あっ♡」

アドルフは吐精を続けながら、繋いだ手を離さずに腰を振る。

触れ合う肌がたんたと乾いた音を立てて、それが興奮に繋がった。

何やら口説かれているようだが、喘ぐのに忙しくて反応なんて出来やしない。

媚薬の効果だけではなく、情動的なものから蕩けてしまった中は、何をされても感じるようだ。

「それでね？結婚したら、できれば現役引退してほしいな……っ♡もう、あぶないこと、しないでえ……？」

「あああっ！んんっ♡きもちいい……！」

長い長い射精を続けながら、奥をごちゅっ♡ごちゅっ♡と突かれる。いい加減気持ち良すぎて、頭が馬鹿になりそうだ。

「エイダッ、エイダッ♡俺の、奥さんになって……？♡♡それで、ずっと、ずっと、一緒にいようっ！♡♡」

「ふあ、あああッ！はげしっ、そこ、や、だあっ♡♡」

未だにちよろちよろと先端から精を吐きながら、アドルフがズンズンと奥を突いてくる。

子宮口をノックされる度に並々注がれた精液が溢れ出し、カリ首の段差で掻き出されていく。

「ああっ、ああ………！せっかく注いだのに………！これじゃあ赤ちゃん、できないよ………！エイダー！ちゃんと精液飲まなきゃだめだろう………!？」

「い………!? やっ、イクっ！イクッ、イク………!!」

叱るように怒涛の勢いでガツガツと体を貪られ、体が天辺へ駆け上っていく。

そうしてグングンと上がっていった性感が、やがてパチンと弾けた。

「ふあ、あああ♡♡」

「……っ!? イキ顔、かわ……っ!!!? うっ!」

「おッ♡♡おおッ♡♡♡」

またビューツ、ビューツで中で、出てる♡

新たな精液が隙間の出来た子宮内に再び注がれ、たぶん♡と満たされた。

「はあっ、はあっ、おまんこ、もぐもぐすごい……! 俺のちんぽ、すき?? おっきくて、硬いでしょ!」

「ひ……っ! あああッ! おっき、おっきい、からあ!」

形を覚えさせるようにズリズリと内壁を擦られて、喉を反らす。

さっき見たから分かってるに決まってるだろう——というツツコ

ミは、入れられない。そんな余裕は微塵もない。

どんなピンチでも臆することなく立ち向かい、切り抜けるこの私

が、僅かに怯んでしまったほどだ。本当に大きい。

「おまえ、それ、子供腕くらいあるじゃん、とかからかわれるんだ！でも、エイダが悦んでくれるならうれしい！だってこの極太ちゃんぽ、エイダ専用だから……！」

「おッ♡♡♡ふかぁ……♡♡♡」

ごちゅっ！と腰を叩きつけられて、太すぎる上に長過ぎる逸物が、精液でたふたぷになっている子宮を押し上げる。

そしてそのままグリグリと腰を押し付けられて、あまりのことにぐると眼球が上向いた。

「毎日、毎日、エイダで精液出してたっ！エイダのまんこにビュービュー種付けするの想像して、いっぱい特濃ミルク出してたんだよ……！」

「お、ぐ……ッ♡♡♡も、おなか、いっぱい……っ♡♡♡」

満タンまで精液を注がれている子宮を先端で押し潰され、その上でまた大量に種付けされる。

入りきらない白濁が隘路を伝ってぼとぼと落ちていき、私の股座を白濡れにしていた。

「もうっ！エイダ、ちゃんと飲んで……!?これじゃあ孕めないよっ」
「ひぎゅ……!?つぶれ……!!」

ぼちゅっ！どちゅっ！ぐちゅっ！

叱りつけるように激しく子宮口を突かれ、小部屋が何度も何度もひしゃげる。

私は強すぎる快楽に口を開け放ち、放心していた。

「ほらっ、また出して……！エイダの赤ちゃんの部屋、俺の精液全然ごつくんしてくれない！なんで、好き嫌いするのっ」

「ふあああっ♡♡ずりずり、しゅご……っ♡」

怒れるアドルフが素早く腰を振り、キツく締まる蜜壺内を、太いもので容赦なく擦り上げる。

どこもかしこも良いところが擦れて。甘く痺れる内壁が歓喜に震えて伸縮し、鋼のように硬い肉杭に縋り付く。

「あっ！エイダ、好き嫌いしてるのに、おまんこ感じてる……っ！俺の精液いらないうって吐き出すのに、俺のちんぽにいっぱい擦られて、うれしいうれしいっておまんこキュンキュンさせるんだ……!?」

「ふあっ、あんツ！んんんっっ♡♡♡」

ごしゅごしゅ♡と精液濡れの隘路を擦られ、追い縋る肉ひだがゾリゾリと擦れる。

ヒクツ♡ヒクツ♡と痙攣する最奥は強かに突かれていて。そこから全身に、重い快樂が流れ込んで来ていた。

「……いッ!? ひゃ、ああッ!!」

右手が自由になったと思ったら、下半身から強烈な快樂が突き抜ける。私はその衝撃に、カチンと体を硬直させた。

——そして遅れて、キュムツ♡と陰核を摘ままれたのだと気付いた。

「こんなにつ、クリちゃんギンギンにして……！このっ、このっ♡プリプリに勃起してるじゃないか……っ！このっ♡反省、したらどうなんだ!？」

「あーッ♡♡クリ、らめ……！イクッ、イク……!!」

ピストンを続けたまま、指先でクリトリスを揉みくちやにされ、器用に皮で芯を扱かれて。ビクビクと痙攣する体に体重をかけてのしかかれ、ばちゅばちゅと腰を叩きつけられる。

「エイダのクリちんぽ小さい……！え、こんなもの？もつと大きいんじゃないの？オナニーしてないの？なんで？なんでっ？クリ

オナ、してないの??」

「い、やあ……! しなっ——だめっ、ン、あああゝっ!」

実際、鍛練で忙しくて自慰行為なんてほとんどしたことがないわけだが。

私の返事を待てないアドルフは、小粒な芽を指先で捏ねながらしつこく腰を振りたくった。

おかげでアツサリと達してしまい、また可愛い可愛いと連呼される。

「エイダ、ちっちゃいクリちんぽが赤くなって腫れてるよ……っ!? あ、そうだっ! これからは俺が毎日、くちゅくちゅ♡ちゅこちゅこ♡して大きくしてあげるからね……! 寝る前に毎晩、クリフェラしてあげるっ♡♡♡」

「いらにゃ、い……!」

「にゃい!? にゃ、にゃにゃ……♡可愛いにゃ♡♡」

可愛い子ぶつてにゃあにゃあ言う男の、腰の動きが可愛くない。
ついでに言うとその表情も可愛くない。

だらしなく頬が緩んでいるのに、目はギラついていて——流石の私でも、若干怖かった。

「はあ、はあっ、ねえっ♡家が建つまで、俺の家で一緒に暮らそうねっ♡♡なんでも、お世話、してあげる♡♡♡んぐ……っ♡」
「ああっ!? ああああッ!」

また、びゆくびゆくと中で出ている。

更には出しながらタンッ♡タンッ♡と奥を突かれて、出しても出してもいつまでも重い睾丸が、尻穴を叩く。

「もうっ! またせいえき溢して……! そんなにゴツクンが嫌なら、お尻まんこに注ぐよ!」

「は……!? 尻はやめてくれ!!」

生殖器でも無い場所に男性器を挿じ込まれそうな予感に、私は力ツ！と目を見開いて絶対にやめてくれと訴えかける。

「えーっ、やだやだ！ エイダの全部を味わいたい！ お尻まんこもぐちゅぐちゅするう！」

「なっ、な……!?」

まずい。このままでは後ろの処女地すら踏み荒らされてしまう。

私は焦り、鈍い思考をどうにか働かせ――

「……ま、まんこ！」

「……!?」

形振り構わず、破廉恥な言葉を叫ぶ。

アドルフは面食らった顔をしたが、すぐに頬をほんのりと赤く染めた。

「私は、……まんこが一番弱いんだ！だからここを突いてくれっ」
「……!?!?ま、ま、まんこが一番弱い……っ?♡♡♡」
羞恥心からぐうっと中を締めてしまい、締め付けたものが更にグ
グッと膨れ上がって反り返る。

「ゾッ!っ、ふ、んんっ!?!?む、う……」

ドプッ♡と吐き出された熱に息を飲めば、興奮したように唇にし
やぶり付かれた。

ベロベロと口の周りも口内も舐め回されて、ちゅうちゅうと唇を
吸われる。

「はあ、はあっ♡じゃ、じゃあ……っ♡今日はとりあえず、いっぱ
いおまんこしようかな……♡」

「っ、んっ、そ、そうしてくれ!!」

アドルフが「エイダはおまんこが弱い……♡」とか言いながら腰

を叩きつけてくるが、この際どうでもいい。

私の尻は守られた。それが一番重要だ。

「エイダのよわよわおまんこ……♡ぐちゅぐちゅで、かわいいね？

♡♡」

「うっ、っ♡そこ、しつこい……っ！」

入り口付近の良いところを執拗にゴリゴリ抉られて、腰が何度も細かく跳ねる。

「ここ？ここはね、Gスポットって言うんだよ♡」

「はあっ、ああっ！んんっ♡あ、ううっ♡」

角度をつけて中を抉り、Gスポットという場所をしつこくゴリゴリされる。

その刺激がキツくて自由な右手でアドルフの体を押し返そうとするが、すぐに捕まって左手と一緒に一纏めにされてしまう。

「……!?このっ、あう、なんで……っ」

力なら、私の方が強いはずなのに。

体勢のせいか、それとも性感帯を嬲られているせいか。

もがいても——いいや。もがこうとしても、どんどんと襲いかかってくる快感で、体から力が抜ける。

「あばれちゃ、だめだよっ！エイダは、悪い子なのっ??悪い子なら……こうだっ♡♡」

「ひ……っ!?んう、うう~~~~っ♡♡」

「またもやクリトリスを摘ままれてしまい、そのままちゅこちゅこ♡と擦られる。」

「チビツ子クリちゃん、悪い子悪い子♡♡ふふっ♡」

「あっ、くう……っ♡んっ、あううっ!♡♡」

皮の先からはみ出した先端を指先でくるくると撫でられ、そこが

熱くなる。

その上、伸縮する蜜口を太いもので容赦なくズリズリと擦られて。それによってグン、と体が仰け反れば、ピンピンとクリトリスが弾かれた。

「イツぐ……っ♡イグ、イグ♡♡イツ、……ッ♡♡」

「わぁ♡♡ピッカピカの初心者クリちゃん、よっわ♡♡い♡♡ちよつと触っただけで、すぐイっちゃ♡♡」

「お……っ！や、めっ♡♡やめえ……っ♡♡♡♡」

あっさりと法悦を極め、ジンジンと甘く痺れているクリトリスが未だにピンピンと弾かれている。

更にはヒクヒクと伸縮する蜜口の上。排尿するための穴がぬるぬると撫でられ、慣れない淡い刺激に腰が戦慄いた。

「お仕置きなのに……ここも、ヒクヒクしてるのかな……？♡へへ、

まだ無理かもしれないけど、いつかはここでビュービュー♡お潮が吹けるようになるからね♡」

「ううつ♡や、そこっ、やめえ……っ！」

親指を使って尿道口を擦られて、やめさせようともがくの拘束している手が離れない。

膣が蠕動し、撫でられている尿道口が彼の予想通りにヒクヒクと震えている。

潮というものがどんなものかは分からないが、今にも出てしまいそうで気が気でない。

「はあ〜っ♡きもち〜♡♡おまんこ、いっぱい吸い付いてきて……♡お溢しした精液と愛液がたっくさん掻き混ぜられて、泡立ちちゃったね?♡」

「んんっ♡ふうっ、ふっ♡は、ううつ♡」

アドルフが言うように中にある液体が泡立ったのか、やたらと抽挿がスムーズだった。

それに、中が擦れる感触が最初と少し違う気がする。

相変わらずゴツゴツ♡と奥をノックされては、子宮からゴポリ♡と精液が溢れ出す。だが、それすらもドンドンと泡立てられていつてしまう。

「ずーっとちんぽ、ギンギンで……♡すぐに精液出るけど、めっちゃくちや気持ちいい……♡ずっと、気持ちいい♡♡すごい……♡この呪い、ほんとうにすごい……♡」

ビクンビクンと跳ねる肉杭は、本当にすぐ、白濁を吐き出してしまった。

けれど何度出しても、全く萎えず。ずっと、硬いままだ。

そしてさあ早く次を出すぞとばかりに、腰が振りたくられる。

「ちんぽ、もつとイクっ♡ちんぽ、好きな子のおまんこでいーっぱいコいて、コキ尽くしてっ♡すぐに満タンになる金玉、空っぽにする♡♡」

「ふあ、あっ！あっ、く……！んんっ♡」

ばちゅっ！ばちゅっ！と激しく、そして素早くピストン運動を繰り返され、ピッタリ♡と怒張に張り付いている内壁を磨かれる。

ゾリゾリゾリッ♡ぬぢぬぢぬぢっ♡

肉ひだが容赦なく摩擦され、私は止まない快楽に歯を食い縛った。
「おまんこっ、キュンキュンしてるよ……!?イきたいの？イきそうなの？可愛いねっ♡もつと、ゴリゴリしてあげるからねっ♡ほら、イクイク♡イクイク♡」

「あああっ♡♡あーっ♡だめっ、ン、う、う……っ！」

特に強く反応した場所を集中的に抉られ、高まっていく性感にガ

クガクと足が跳ねた。

ヒク、ヒクと伸縮する中を愛でるように下腹部を撫でられて。より執拗に感じる場所を刺激されていく。

「がんばれ♡がんばれ♡イクイク♡イクイク♡ここ、きもちいいね♡♡おまんこちゃん、ずーっとヒクヒクしてて、かわいい♡ほら、もうちよつとだよ♡イクイク♡イクイク♡イクイクーっ♡」

「イっ、く……！やあ、イク……!!」

「ああっ♡♡イツちゃったあ♡♡♡」

ぎゅうぎゅうと怒張を抱き締めながら、とうとう限界を迎えた精液濡れの子宮が、震えて法悦を極める。

「ふあ、ああ、ああ……♡♡♡」

「あー♡♡可愛い……♡♡イクイク出来て、気持ちいいね♡♡♡」

「おっ♡♡おっ♡♡」

安心して口を開け放つ顔をじっと見つめられ、絶頂の余韻で未だにきゅんきゅんしている子宮の入り口を、ずちゅっ♡ずちゅっ♡と突かれる。

濁った喘ぎを漏らす口は舐め回され、突き出した舌はしゃぶられる。

「イキたておまんこ可愛い♡もっと、よしよししてあげるね……♡よしよし♡よしよし♡イクイクできて、偉いねえ♡よしよし♡ゴリゴリ♡ぐちよぐちよ♡」

「ひぐ……ッ！んえッ!?あ、おッ♡♡♡」

まだ余韻が消えていないのに、バツバツと腰を叩きつけられて、微かに震えている膣壁をゾリゾリ♡と擦られ出す。

覚えたイイところを容赦なく抉られ、頭が気持ちいいしか分からなくなった。

「おまんこ、ずーつとヒクヒクしてるね♡奥も……こうやって♡上からドチュッ♡ドチュッ♡って思いっきり、突いてあげる♡」
「ぶっおっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡」
上から全力で腰を振り下ろされて、子宮がぼちゅっ♡どちゅっ♡と強く叩き潰される。

そしてその度に、奥に溜まっていた精液がぶっ♡ぽっ♡と溢れ出し——子宮口にキスをした先端から空いた子宮の隙間に向けて、新たな精液が注がれた。

「ほっ♡♡おっ♡♡えっ♡♡♡」

「あ……っ♡またイツたね？♡ふふ、まんこちゃん、イイ子だねえ……♡♡ご褒美に、またいっっぱい、ゴリゴリしてあげる♡♡」
ぼちゅっ♡ずちゅっ♡ぐちゃっ♡グヂュッ♡

このえげつない音が、自分の股間から聞こえてるだなんて信じた

くない。

それでももう、お尻まで精液でドロドロで。そこを重たい睾丸で叩かれるものだから、私は現実を突き付けられる。

「はあっ、ふうっ♡ちよっと、体勢変えようかつ♡」

「あっ、うう……っ？おっ♡♡♡」

ずっちよずっちよとしつこく律動を繰り返されていた、ところで。いきなりズルン♡と怒張が抜け出て、その衝撃で頭が真っ白になった。

「おっお……♡お……っ♡」

「はーい、俯せになろうねえ♡」

放心している間にぐるんと世界の上下を入れ替えられ、目の前にシートがやってきた。左頬に触れたシートの冷たさを心地よく感じながら、私はただ、白を見つめる。

「よいしょっ♡んんっ♡」

「お……っ!? あぁーッ!!」

「はあ、ただいまっ♡」

ずるっ♡じゅばんっ♡♡

また大きなものが入り口を押し広げたかと思えば、一気に奥まで貫かれてしまった。

ゴツン♡と最奥を叩かれたその衝撃に、私はシートに手を突いて背を反らし、女豹のようなポーズを取りながら放心する。

「ふっ、ふか……♡ふかしい……っ♡」

「っ、はあっ♡そうだね、すごく深くまで入っちゃったね……♡」

あまり肉のついていない尻臀を両手で掴まれて、左右に割られる。そしてそのまま露になった秘部へ、ゴチュツ♡と怒張を振じ込まれた。

「ひ……ッ！お、あ、ズん……ッ!!」

「……ふふっ♡可愛いアナルが、ヒクヒクしてる……♡」

尻穴を見つめられながら、犯されている――

そう気付いて、かあっと体温が上がった。

ほぼ女を捨てているとは言え――そんなところを見つめられて、平気でいられるわけがない。

「俺の精液でぬらぬらで……トロツとしてるね……」

「や、やめ……っ！そんな、見るなっ」

後ろに手を伸ばしてどうにか止めさせようとするが、空を切るばかりで掠りもしない。

むう、とむくれる音がして。第六感がまずいと告げた。

「減るもんじゃないんだし、いいじゃない。……けちっ」

「うっ、……あっ!？」

「あっ」

っん、と後孔に突き立てられた指が、思いの外力強かったのか――白濁のぬめりを得て、ぬるんっ♡と中に入り込んだ。

「ひい……っ！」

肛門括約筋を押し広げて、ゆっくり、ゆっくりと異物が押し進んでくる。

ぽってりとした窄まりが緩く擦れて、じんと熱くなった。

「わあ、どんどん入ってく……」

「あえっ？ えっ、……えっ!？」

私が混乱している間にも、細長いものが少しずつ、奥を目指して進んでいく。

ゆったりとした動作で愛でられている膣壁は、強い刺激を浮けないのに、ビクビクと痙攣していた。